

小学6年生児童の実例研究

——埼玉県A小学校の事例…着装の実態と意識——

内野昌恵*

A Comparison of Clothes Worn for Everyday School Life and Those Worn for School Excursions

—A Case Study of Sixth Graders in Saitama Prefecture—

Masae Uchino

要 旨 服装に関する意識調査は他の研究でも多く行われているが、主として被験者が服装を比較的自由に選べる大学生の場合が多い。しかし、人間の発達段階において、自己表現としての着装の欲求はより低年齢から行われている¹⁾と推測し、本研究では自己概念の発達が進み着装行動に自主性が見られると推測される小学校6年生児童を被験者とした服装に関する意識調査を行った。内容は①着装の実態②購買行動の実態③服装に関する意識・関心度である。これらを男女別、日常と非日常（本研究では修学旅行時）でアンケート調査を行った。

主な結果は次の通りである。1. 着装の実態では日常着は男女間でアイテム別の好みが見られた。特に帽子については男子が日常、非日常に関わらず、好む傾向にある。2. 被服購入時には男子より女子が自主的に購買行動を行っている。また、非日常（修学旅行時）の購買行動の方が男女とも自己の意見を主張するが日常との差で有意差が認められるまでには至らない。3. 服装に関する意識・関心度は男子に比べ女子に高い関心度が認められた。しかし、色・柄・ブランドのロゴマークに関しては、男子も比較的兴趣がある。

I はじめに

他の服装に関する意識調査の研究では主に被験者が服装を比較的自由に選べる大学生の場合が多い。しかし、人間の発達段階において、自己表現としての着装の欲求はより低年齢から行われている¹⁾と推測し、本研究では発達段階においてプレイ段階からゲーム段階の移行期にあたり²⁾、自己概念の発達が進み着装行動に自主性が見られると推測される小学校6年生児童を被験者とし、着装の実態と意識・関心度を男女別比較し、さらにシチュエーションによる着装の実態・意識変化の比較のため、日常とは異なるが普段着を着用し、被験者が同一状況下と

なる修学旅行時を非日常として設定し、着装行動・購買行動について調査した。

II 研究方法

1. 調査対象

埼玉県さいたま市において地域的に平均とみられるA小学校6年生児童130名。その内訳は次の通りである。

男子……67名

女子……63名

合計 130名

2. 調査方法

調査方法はアンケート調査法とした。

質問紙の製作にあたっては被験者が11～12歳であることを考慮して選択肢を極力少なく、理

* 本学助手 被服構成学

解しやすい文章になるよう留意した。

3. 調査期間 平成12年10月 5日～12日
修学旅行 平成12年10月 3日～4日
(場所…栃木県日光)
4. 調査期間の天候 表1に示す。

表1 調査期間の天候

地域	月/日 (曜)	天 気	平均気温 (℃)	最高気温 (℃)	最低気温 (℃)
栃木	10/2(月)	曇りのち雨	18.0	21.2	16.3
	3(火)	雨一時曇りのち晴れ	20.1	25.5	16.2
	4(水)	曇りのち時々晴れ	20.4	24.4	18.0
	5(木)	曇り	19.5	21.5	16.6
埼玉	6(金)	曇り	19.7	24.0	15.4
	7(土)	晴れ	19.2	23.6	14.8
	9(月)	雨のち曇り	15.9	17.3	14.4
	10(火)	曇りのち晴れ	19.3	24.9	13.7
				(気象庁)	

5. 回収率 100%

但し、質問事項により無回答があったため、
各々の結果で示す。

6. 質問内容と各々の分析方法 (図1)

質問内容は大きく分けて3つとする。

(1) 着装の実態

日常着、部屋着、寝間着について、アイテム別の選択肢から回答する方法で調査した。日常着については日常をアンケート実施日の服装とし、非日常を被験者が同一状況下で、服装が行事などで制約を受けることの少ない状況を考え、修学旅行時とした。結果を単純集計した。

(2) 購入時の実態

被服購入時(日常と非日常)に本人の意見がどの程度、反映されているか、4段階の選択肢(①お父さんやお母さんの意見が全て。②お父さんやお母さんの意見も聞くが自分の意見も聞いてもらう。③お父さんやお母さんの意見も聞くがほとんど自分の意見。④自分で選ぶ。)から回答する方法で調査した。回答を単純集計後、男女別の差と日常と非日常の差を各々カイ自乗検定で分析した。

(3) 服装に対する意識・関心度

服装に対する意識・関心度を示す質問項目12問を設定し(表2)、はい、いいえの二者択一方式により回答された結果を各項目ごと単純集計後、男女間の差をカイ自乗検定で分析した。

洋服にかんするアンケート
組番氏名 _____

※ここでいう服は下着以外と考えて下さい。

1. 今日の服装を別紙から選んで答えて下さい。
例. ② ① ⑨ ⑮ 答. その他()
2. ふだん夜、寝るときの服を別紙から選んで答えて下さい。
 その他()
3. 休日などに家でくつろぐ時の服を別紙から選んで答えて下さい。
 その他()

5. ふだん服を買ったり、選んだりする時、どうしますか? ○をつけて下さい。
①お父さんやお母さんの意見が全て。
②お父さんやお母さんの意見も聞くが自分の意見も聞いてもらう。
③お父さんやお母さんの意見も聞くがほとんど自分の意見。
④自分で選ぶ。
6. 修学旅行のときの服を別紙から選んで答えて下さい。
1 日目(東照宮などの見学) その他()
ホテルでくつろぐ時 その他()
2 日目(戦場ヶ原ハイキング) その他()
夜、寝るときの服 その他()

9. 次の間にはい・いいえで答えて下さい。○をつけて下さい。
①お気に入りの服がある。 はい・いいえ
②その日の服を決めるのが楽しい。 はい・いいえ
③服は着やすければどんなものでもよいと思う。 はい・いいえ
④自分に似合うかっこうを知っている。 はい・いいえ



図1 質問紙(抜粋)

表2 服装に関する意識関心度の質問項目

質問項目
①お気に入りの服がある
②その日の服を決めるのが楽しい
③服は着やすければどんなものでもよいと思う
④自分に似合う格好を知っている
⑤自分の格好を友達がどう思うか気になる
⑥友達が素敵な格好をしていると自分もしたい
⑦友達と服について話すことがよくある
⑧服や髪型に関心がある
⑨雑誌やテレビを参考に服や髪型を決めることがある
⑩みんなに好かれるような服を着たい
⑪色・柄・ブランドのロゴマークにこだわる
⑫自分に相談なしで親が買ってきた服は気に入らない

III 結果及び考察

1. 着装の実態

(1) 日常着 (図2)

男女別に比較すると、日常、非日常にかかわらず上衣では、男子は比較的Tシャツ、トレーナー・スエット、ポロシャツを好む傾向にあり、女子はシャツ・ブラウス、カットソー、

カーディガンを好む傾向にあると言える。

下衣については(スカートを除く)、男子が半ズボン、女子がジーンズを好む傾向にあると言える。

また、その他のアイテムでは、特に帽子の着用の差が顕著で、男子は修学旅行時1日目…17.9% 2日目…26.9%。さらに日常においては実に37.3%が帽子をかぶっている。これに対し、女子は日常は0%、修学旅行時でも1日目の1.6%のみで、2日目はハイキングを行っているにもかかわらず、0%となっている(図3)。この結果は帽子を着用することで髪の型にくずれを女子が嫌っていることが推測される結果である。

日常と非日常の比較を考察すると、ジャンパー、パーカーが男女とも修学旅行時に比較的多い。また、長ズボン、ジーンズのアイテム数が修学旅行時(2日目—ハイキング)に増加し、半ズボンが減少している。これは、服装選択の

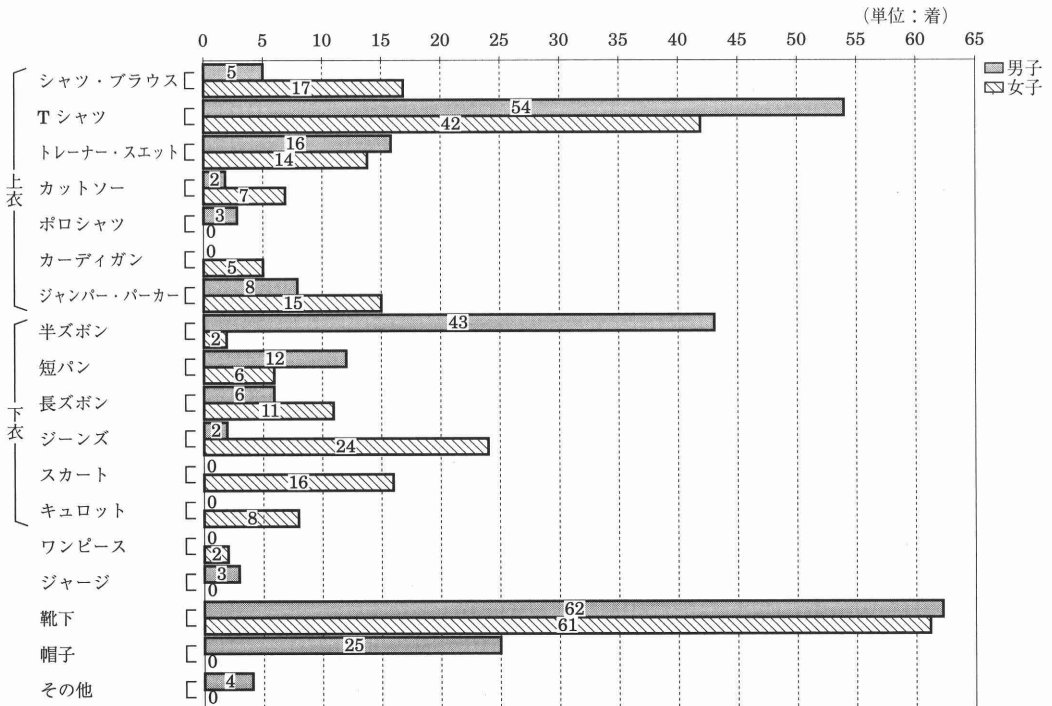


図2-1 日常着—今日の服装(日常)—

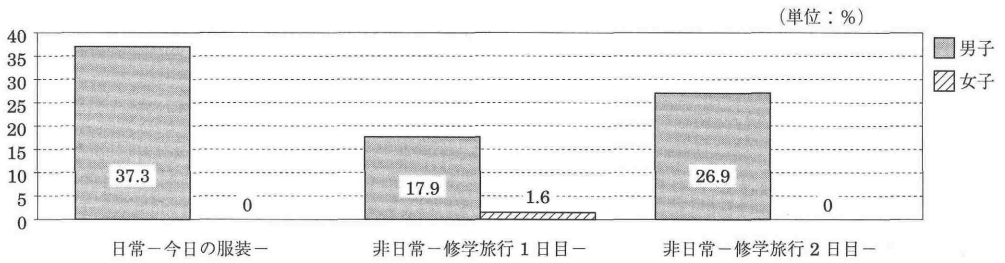


図3 帽子の着用率

基準に気候や場所といったTPOを考慮した結果と推測され、学校や家庭の衣生活教育が反映していると思われる。

(2) 部屋着 (図4)

男女別に比較すると、上衣、下衣とも日常着と同じ傾向が見られた。また、日常と非日常の比較でも特に大きな変化はなく、部屋着と日常着のアイテム別の変化は見られない。今後、被験者である小学校6年生の日常着と部屋着の認識調査を進めたいところである。

(3) 寝間着 (図5)

男女別にみると、男女ともパジャマが最も多い。

日常と非日常の比較では、男子はほとんど変化が見られないのに対し、女子は修学旅行時にパジャマが減少し、その他のアイテム(トレーナー・スウェット、ジャージ、シャツ、長ズボン)が増加する傾向が見られた。

2. 被服購入時の実態

被服購入時における被験者の意識の強さを調査した質問である。結果は男女別では日常、非日常とも女子では約65%が「自分で買う」「ほとんど自分の意見」で購入しているのに対し、男子は約35%にとどまり、1%の危険率で有意差が認められた(図6)すなわち、男子より女子の方が「ほとんど自分の意見」や「自分の意見で購入」している実態が明らかになり、女子の自己概念の発達の早さが現れた。

さらに、日常と非日常の比較では(図7)非日常(修学旅行時)の購入購入において「親の意見」で購入が男子7.4%、女子は9.5%減少した。それに対し、その他の選択肢の「自分の意見も聞いてもらう」「ほとんど自分の意見」「自

分で買う」が若干ずつ増加しているものの有意差は見られなかった。すなわち、修学旅行という行事に対する服装のこだわりを被験者は意識しているものの有意差が見られるまでには至らない、という結果が明らかになった。

3. 服装に対する意識・関心度

集計結果及び男女間の差をカイ自乗検定で分析した結果は図8である。

各質問別に見ると、男女とも肯定した質問は①「お気に入りの服がありますか。」で男子77.6%、女子92.1%が肯定であった。また③「服は着やすければどんなものでもよいと思う」も否定の回答が服装への高い関心度を示し、男子70.1%、女子93.7%が否定の回答であった。

次に、否定した質問は⑥「友達が素敵な格好をしていると自分もしたい」⑦「友達と服について話すことがよくある」⑨「雑誌やテレビなどを参考に服や髪型を決めることがある」⑩「みんなに好かれるような服を着たい」⑪「色・柄・ブランドのロゴマークにこだわる」であった。

また、男子は①「お気に入りの服がある」以外は全て否定的である。しかし、その中でも⑪「色・柄・ブランドのロゴマークにこだわる」は、比較的高い値を示していて、後述する男女の比較でも有意差が認められず、色・柄・ブランドのロゴマークに対する好みは男子も比較的高いと思われる。

また、男女間での差の検定結果は⑪「色・柄・ブランドのロゴマークにこだわる」以外の質問については5%または1%の危険率で有意差が認められ、男子に比べ女子が肯定的な回答を示しており、服装への関心は比較的女子が強いことが伺える。

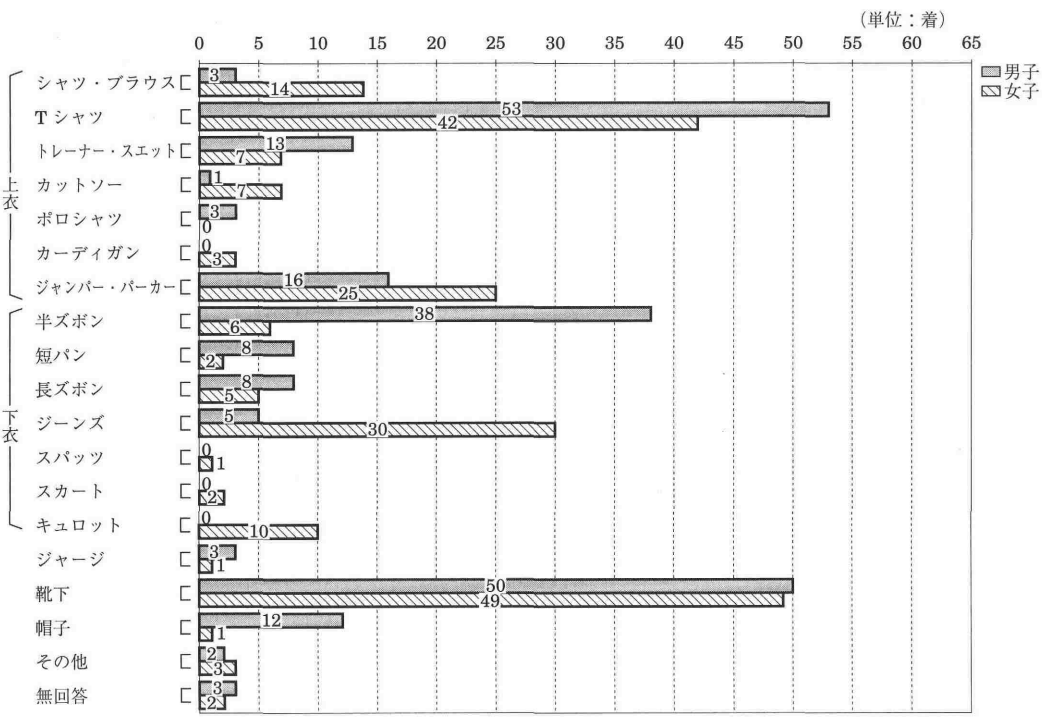


図 2-2 日常着—修学旅行 1 日目 (非日常)—

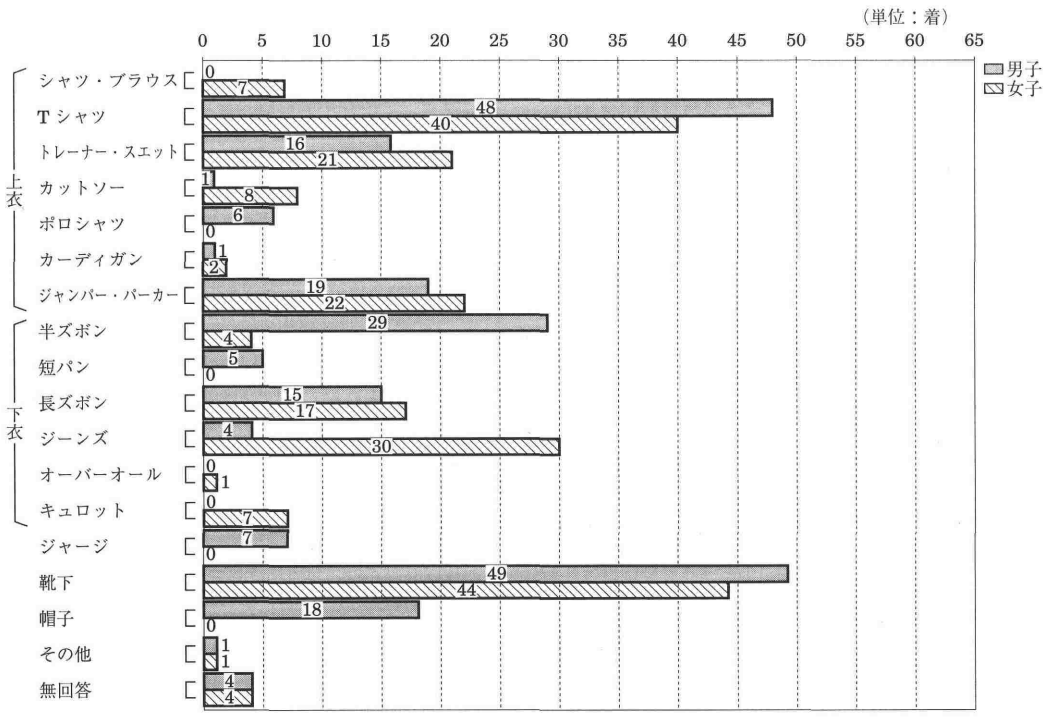


図 2-3 日常着—修学旅行 2 日目 (非日常)—

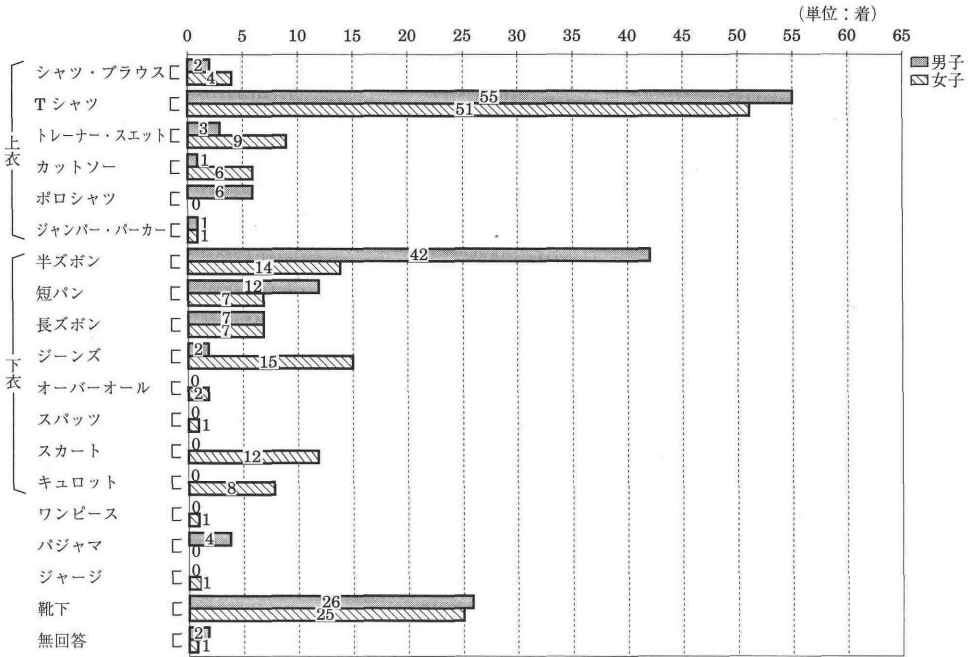


図 4-1 部屋着 (日常)

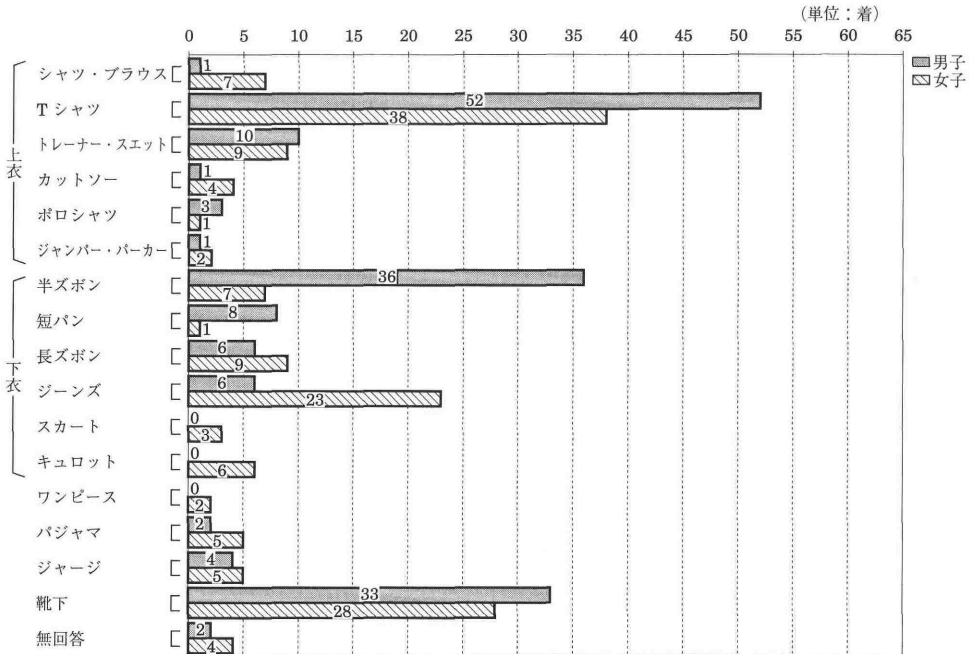


図 4-2 部屋着—修学旅行 (非日常)—

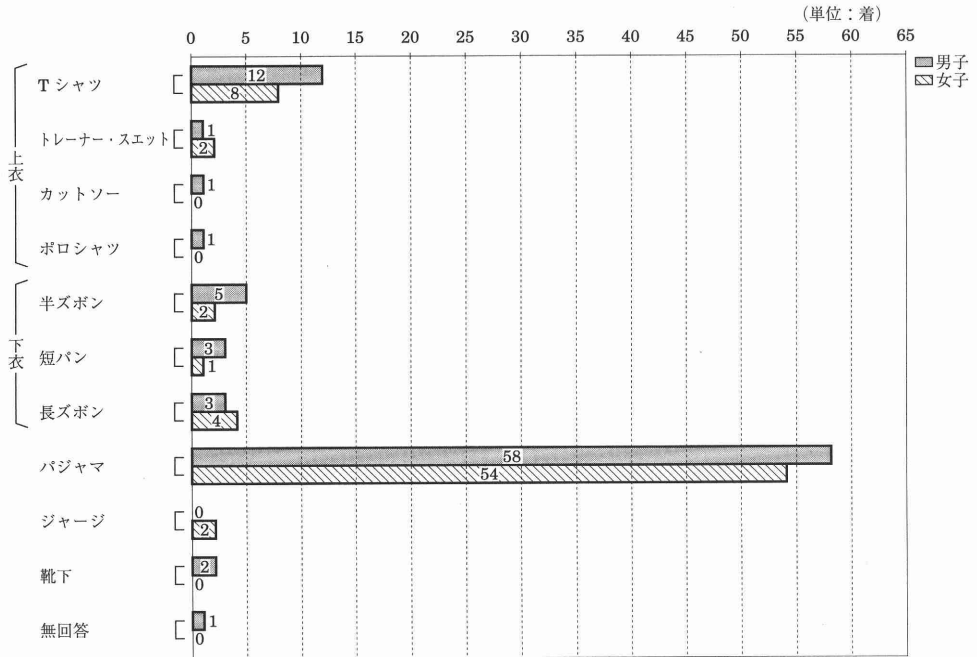


図 5-1 寝間着 (日常)

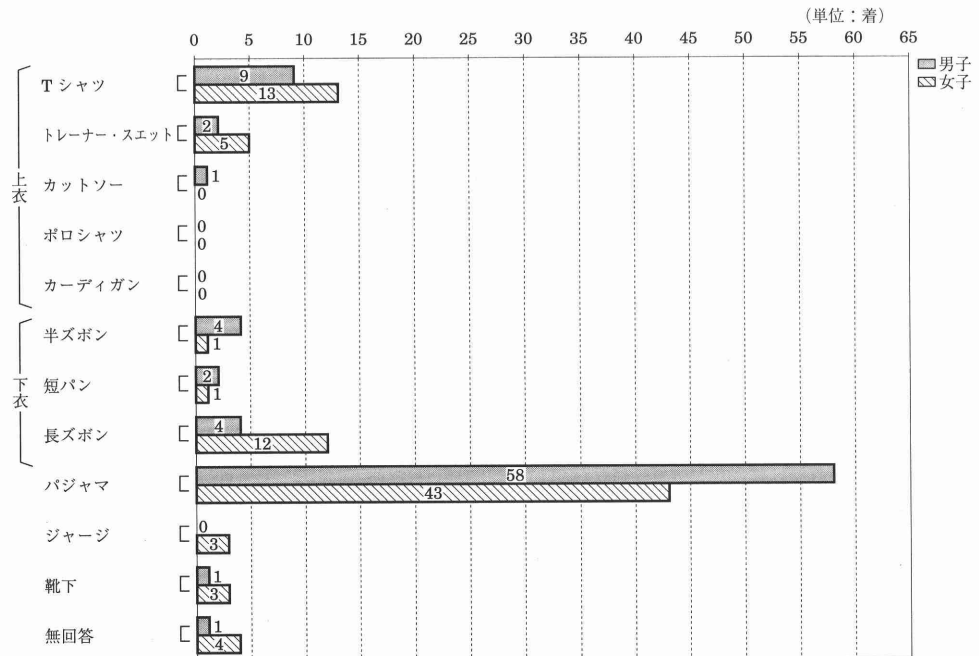


図 5-2 寝間着—修学旅行 (非日常)—

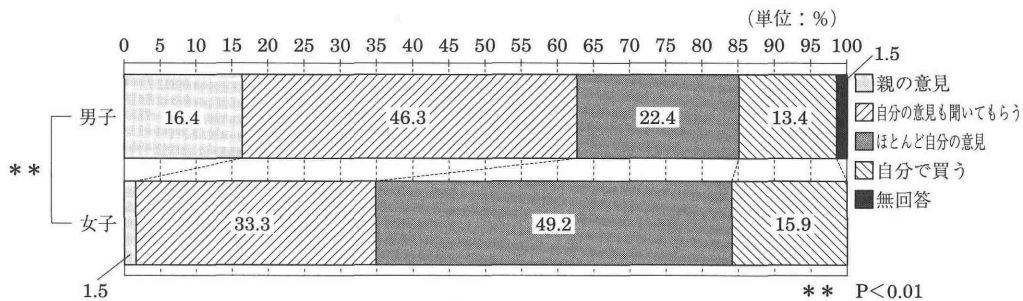


図 6-1 被服購入の実態 (男女比)—日常—

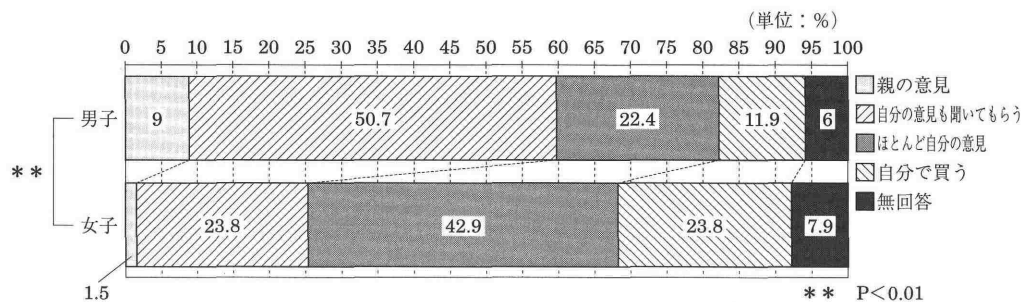


図 6-2 被服購入の実態 (男女比)—修学旅行—

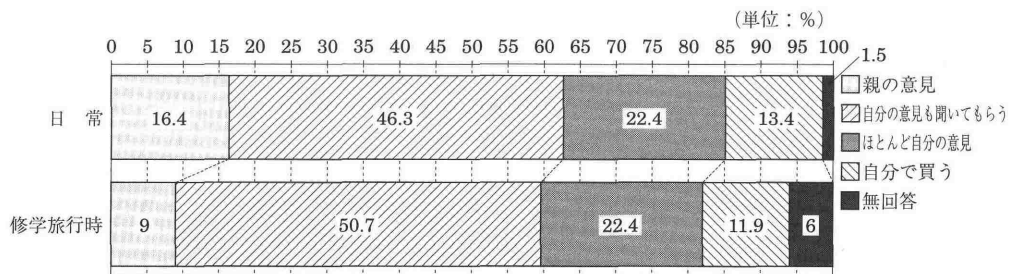


図 7-1 被服購入の実態 (日常と非日常の比較)—男子—

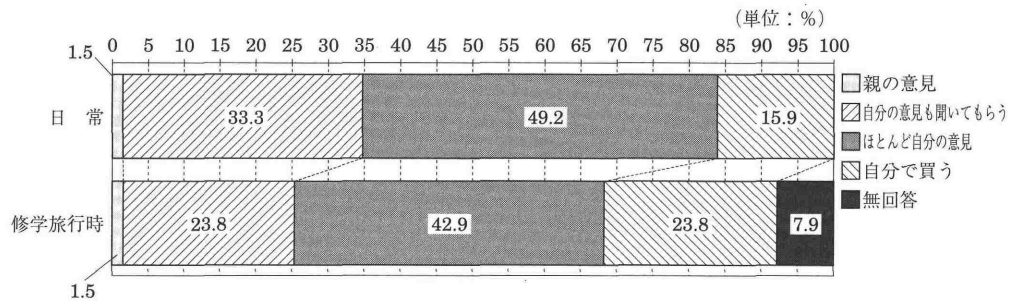


図 7-2 被服購入の実態 (日常と非日常の比較)—女子—

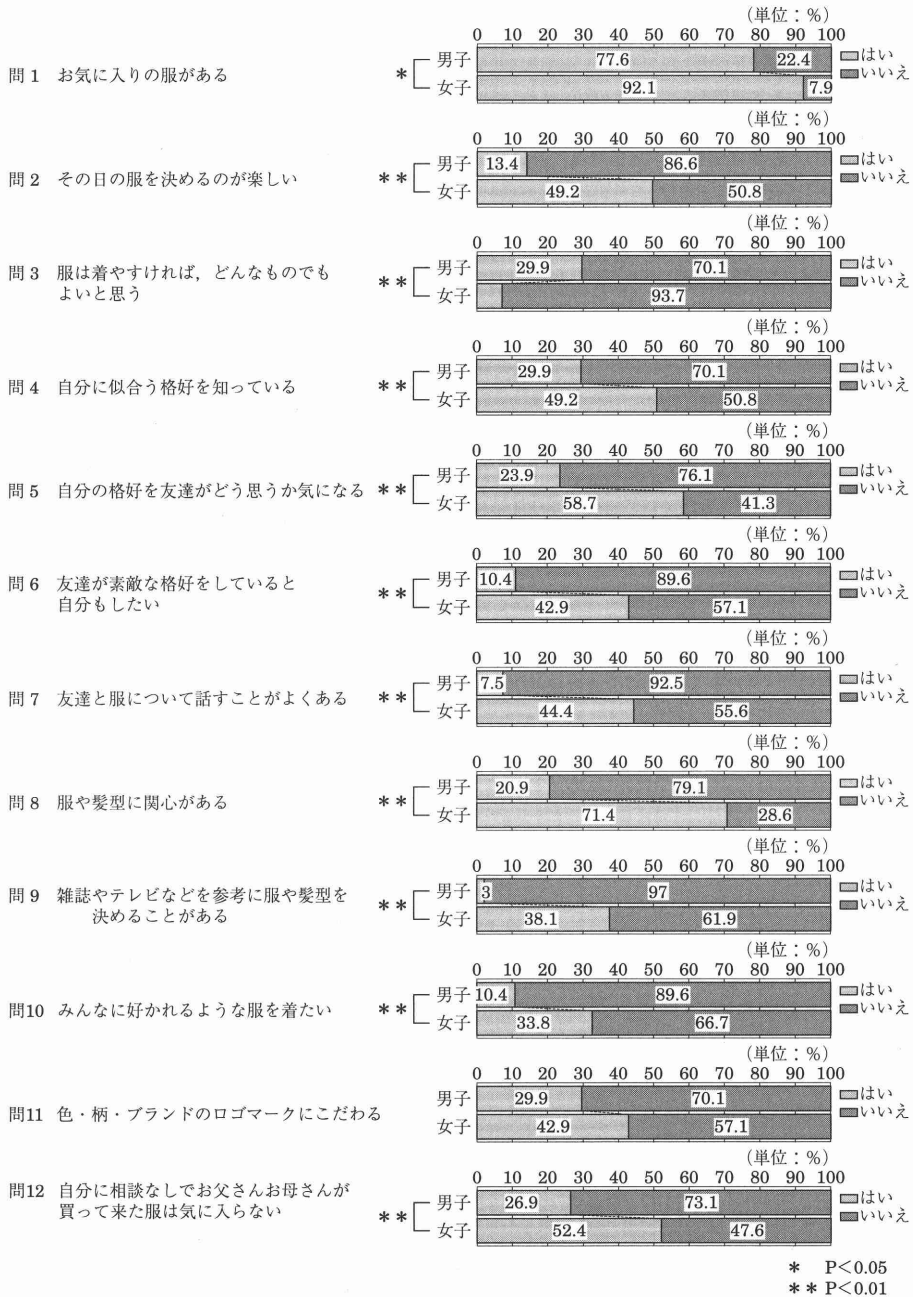


図 8 服装に対する関心

Ⅳ 総括

服装行動に自主性が見られると推測される小

学校 6年生児童を被験者とし、着装の実態と意識・関心度を男女別比較した。また日常と非日常での服装行動・購買行動についても調査した。意識調査の結果は、以下の通りである。

1. 着装の実態

日常着では男女間でアイテム別の好みが見れた。特に帽子については、男子が日常、非日常に関わらず好む傾向にある。

部屋着については男女ともアイテム別の変化は見られなかった。

寝間着については男子は日常と非日常で変化はないが、女子は非日常でパジャマ着用の減少が見受けられる。

2. 被服購入時の実態

男子より女子が自主的に服装選択を行っている。日常と非日常（修学旅行時）では若干修学旅行時に自主的な服装選択が見られたが有意差が示されるまでには至らなかった。

3. 服装に対する意識・関心度

男女差で見ると女子の方が服に対する意識・関心度が高い。色・柄・ブランドのロゴマークに関しては男子も比較的関心がある。

したがって、今回の調査対象であるA小学校6年生児童は服に対する意識・関心度は比較的、女子のほうが強いことが購入時の実態調査と意識・関心度調査から明らかとなった。また、シュチュエーションの違いによる着装の実態・意識については修学旅行時と日常との著しい差異は男女とも現れなかった。

今回の研究では、被験者数が130名と少数であったが今後は調査数を拡大していきたいと考える。また、シュチュエーションの違いによる着装の実態・意識の変化を今後様々な設定や季

節の変化などを考慮して研究を進めたいと考える。

謝辞

終わりに、本研究をまとめるにあたり、終始ご指導頂きました本学短大部服装造形学教授中屋典子先生に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 被服心理学：日本繊維機械学会被服心理学研究分科会編，P 34 (1988)
- 2) 表現としての被服：日本家政学会編，朝倉書店，P 109～114

参 考 文 献

- 1) 井手真理・小林茂雄：小学校高学年児童の被服に対する意識，共立女子大学家政学部紀要第37号 (1991)
- 2) 鈴木直恵・岡田宣子：小学校3年生から6年生の女子の衣生活行動，繊維製品消費科学 Vol. 41 No. 10 (1999)
- 3) 児童期・青年期の心理と生活：吉田辰雄，日本文化科学社
- 4) 小学校家庭科の研究 改訂版：家庭科教育学部会，教師養成研究会編，学芸図書株式会社
- 5) すべてがわかるアンケートデータの分析：菅民郎，現代数学社
- 6) FASHION with STYLE：高村是州 株式会社グラフィック社